

Bookstart Newsletter



2018
夏
No.61

ブックスタート・ニュースレター



愛知県日進市

特集

母子保健の視点でみるブックスタート

～育児支援としての可能性～

ブックスタートは地域に生まれた「すべて」の赤ちゃんを対象とした活動です。そのため、多くの地域では、受診率が高い赤ちゃんの集団健診など、母子保健事業の機会に実施されています。

母子保健事業では、赤ちゃんの発育や健康状態を確認することはもちろん、近年では、保護者に対する「育児支援」も重要性を増しています。そしてブックスタートは、その手段のひとつとして注目されています。

では、そもそも母子保健事業でブックスタートを実施することには、どのような意義や可能性があるのでしょうか？

乳児健診を担当する健康課（保健センター）が事務局となりブックスタートを実施している愛知県日進市の取り組みと、地域看護学の専門家の声から探ります。

ケーススタディ
愛知県日進市



日進市では、健康福祉部健康課が中心となり、3～4か月児健診でブックスタートを実施しています。

身近に頼れる存在がいない
子育て世帯が増加

交通のアクセスもよく、名古屋市や豊田市のベッドタウンとしても人気の高い日進市。若い世代が増えており、毎年約1000人の赤ちゃんが誕生しています。

都市開発が進む中、親子をとりまく環境にも変化が見られるようになりました。近年では、身近な所に親類が暮らしている世帯が減少し、子育てにつ



ボランティアのやさしい声に赤ちゃんはご機嫌。ママもにっこり笑顔に。

いて、ちょっとした悩み事を相談できる相手がおらず、漠然とした不安を抱えている人も少なくありません。そうした中で、健診においても親子の心のケアをしていくことが、今まで以上に求められるようになりました。

待ち時間を有効活用。
保護者が得る「気づき」

ブックスタートは、健診の待ち時間を活用して、ロビーで実施しています。

赤ちゃんに絵本を読み、図書館の案内などを行うのは、公募で集まった24名のボランティアです。活動の意義や健診の状況などについて研修を受け、ブックスタートに協力しています。

順番を待つ間に、絵本を介して楽しいひとときを過ごすことで、赤ちゃんにも、保護者にも笑顔が広がります。また、ボランティアが愛情いっぱいに赤ちゃんに語りかける様子から、まだ言葉を話すことができない赤ちゃんとの関わり方に気づきを得る保護者もいます。

指導するのではなく、自然な形で気づきを促していくことを、日進市の健診では大切に考えています。



待ち時間にブックスタートを実施。ボランティアが一組一組の親子に声をかけます。

保護者の本音に向き合い
次の支援につなげる

こんなこともありました。

―診察で、赤ちゃんの首がまだ座っていないことを知ったお母さん。医師や保健師の前では気丈にふるまっていたが、ブックスタートでボラン

VOICE



健康福祉部健康課
保健師
宮田 あかねさん

ブックスタートを始めてから
健診に笑顔が増えました

お母さん方の心の健康を支援する上でも、地域の皆さんのあたたかなまなざしは、とても大きな力となります。ボランティアさんが、より身近な立場からやさしく声をかけてくれることで、皆さん安心できるようです。健診にブックスタートが入ったことで、笑顔が増えました。ブックスタートを健診でやらないなんて、もったいないですね。



ボランティアの皆さんと

ティアにあたたかな笑顔で迎えらるると、気持ちが緩んだのか、ふと涙があふれてきました。お母さん一人では抱えきれなかった不安な気持ちに、ボランティアはそっと寄り添いました――日進市のブックスタートにおいて、ボランティアは保護者の心をやさしく受け止めるという役割も果たしています。また会話の中で垣間見られた親子の様子を、必要に応じて保健師に伝えることで、保健師はその情報を今後の支援に役立てています。健診の中では見えにくい、保護者の心の声を拾い上げ、親子の心に丁寧に向き合う。そうしたきっかけをつくることも、ブックスタートに期待されています。

専門家から



健康科学大学 看護学部長
山梨大学名誉教授
山崎 洋子 さん

東京都墨田区・千葉県旧大原町（現いすみ市）で保健師として地域保健に従事した後、大学教員に。専門は地域看護学・公衆衛生看護学・家族看護学。

2001年「健やか親子21」がスタート。
育児支援がより重要に

日本でブックスタートが本格的に始まった2001年は、母子保健においても動きがあった年です。「健やか親子21※1」がスタートし、健診においても、これまで以上に育児支援に重きがおかれるようになりました。保健師は、地域に暮らす「すべて」の人たちを対象に様々な事業を行っています。ブックスタートも同様に「すべて」の赤ちゃんとその保護者を応援していくという目的を持っています。この活動を知った時、私は保健師だけでなく、図書館の方など様々な立場の人たちが、育児支援に強い関心を持ち、すでに動き始めているということを知り、とても新鮮に感じました。

※1「すべての子どもが健やかに育つ社会」の実現を目指し、関係するすべての人々、関連機関・団体が一体となって取り組む国民運動

ソーシャルキャピタルとしての魅力

ブックスタートは、絵本をツールとして、赤ちゃんとその保護者や家族、そして親子と地域社会との間に様々なつながりを生み出します。ソーシャルキャピタル(Social Capital)※2という言葉が、近年、地域保健の分野でも注目されていますが、ブックスタートもその魅力を持つ活動ではないでしょうか。

例えば、健診でのブックスタートの楽しい体験は、保護者が、何か気になることがあった際に「保健師に相談してみようかな？」と思ったり、街なかでボランティアと再会した時に、声をかけあうような関係性を築く一助にもなることでしょう。

※2社会や地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念。定義はさまざまだが、ソーシャルキャピタルが豊かな社会ほど、他人への警戒が少なく、治安・経済・教育・健康・幸福感などに良い影響があり、社会の効率性が高まるとされる。



「絵本」が各家庭に何をもたらすか。
そこに着目し、継続的に関わっていく

今、全国的に出生数は減少しているものの、保健師の業務は多忙になっています。そうした中で、ブックスタートの現場は図書館の方などに「お任せ」状態になっているケースもあると聞きますが、それは少し残念ですね。

以前、ブックスタートを受けた親子にヒアリング調査をした際、三世代同居で印象的な家庭がありました。大きな敷地の中に一軒ぼつんと立つそのお家の中で、赤ちゃんのお母さんは、お嫁さんとして暮らしていました。義父母との間に少し心の距離がありましたが、ブックスタートがきっかけとなり、家族の中に「絵本」という共通の話題が生まれました。それによって関係性も少しずつ変化し、三世代がひとつの家族である、という感覚が徐々に生まれていったそうです。

継続的に親子と関わりを持てるのは、保健師の強みです。「このご家庭では、お渡しした絵本がどのように楽しまれているだろうか？」そんな観点から継続的に関わりを持つことで、親子や家族の関係性も、鮮明に見えてくることもあるように思います。育児支援を一層充実させていくための手段のひとつとして、ブックスタートを捉えてみることはできるのではないのでしょうか。

住民だからこそできる活動を

北海道湧別町ボランティア **宮澤 道さん**

プロフィール: 湧別町のボランティアサークル「ルピナスの会」代表。図書館協議会委員・社会教育委員として、ブックスタートの実施を行政に働きかけ、立ち上げ当時から事業に携わる。「子どもの誕生を祝う実行委員会」委員長なども務める。

手作りのバッグに愛情を込めて

湧別町では4か月児健診時にブックスタートを実施しています。小さな町ですが、初対面の方も多く、健診ということで緊張しているお母さん多いらしいので、笑顔でゆったりした口調で話しかけるように心がけています。

ブックスタートでは、絵本と一緒に、住民からのプレゼントとして手作りの絵本バッグを贈っています。ひとつひとつ生地柄の組み合わせを変え、愛情をこめて作られたバッグは、世界にひとつだけのもの。行政だけでなく町全体で、子育てを見守っているというメッセージにもなっています。

図書館や児童館などでは、プレゼントしたバッグを実際に使ってくれている親子を見かけます。「愛用しています」「とてもかわいくて気に入っています」などの声を聞くと、本当に嬉しいです。



「ルピナスの会」の皆さん。これまでに手渡したバッグは500個以上。町の花でもある「チューリップ」の名札には、赤ちゃん一人ひとりの名前が刺繍されています。

私たち「ルピナスの会」会員や図書館職員だけではなく、バッグと一緒に作ってくださる方、チューリップの名札を作ってくれる地元高校のボランティア部の生徒さんなど、たくさんの方の協力があってこそブックスタートだと思います。事業開始から12年目を迎え、5歳児健診の機会に絵本をプレゼントするブックスタートプラスも始まりますが、これからも、常に新たな気持ちで対象の親子に向き合いたいと考えています。たくさんの方の協力者からの

支援と、子どもとその親御さんが喜んでくださるのが、私たちの活動の原動力になっています。

赤ちゃんの誕生を地域で祝う気運の高まり

ブックスタートが始まったことで、親子連れに気軽に声をかけられるようになったと町の変化を感じています。ただ、積極的に人と交わることができる方は良いのですが、孤立しがちな、地域にまだ馴染めないでいる方へのアプローチはさらなる課題だと考えています。

湧別町は少子化が顕著で、それぞれの家も少し距離があるため、なかなか親どうしで集まることができない環境です。子どもが安全に遊べ、親どうしも気軽に話せる場が欲しいとの声を受け、月1回、自宅と庭を開放して「ママとキッズのオープン・ブック・カフェ」を始めました。ブックスタートでお渡ししている案内チラシや口コミなどをきっかけに、毎回何組もの親子が参加してくれます。図書館も絵本100冊を持参し、その場で貸し出しを行うなど、協力してくれています。

また、一昨年からは、町の有志による実行委員会が実施する「子どもの誕生を祝う花火」の打ち上げも始まりました。ブックスタートに加えてこうした取り組みも行われ、赤ちゃんの誕生を地域で祝う気運が高まっていることを嬉しく思っています。

行政だけではなく、住民だからこそできることがあると信じて、これからも活動を続けていきたいです。

(まとも：NPOブックスタート)



宮澤さんが自宅で開いている、オープン・ブック・カフェの様子。

コトコト ことのは

スタッフが出合った言葉

彼らの寝相を見たら「個性を育む」なんて能書きは吹っ飛んでしまうでしょう。(中略)
どの子も、眠っているだけでももうすでにこんなに個性的じゃないか、ってね。

今年5月に92歳で永眠された、絵本作家かこさとしさんのご著書『未来のだるまちゃんへ』(文春文庫)から。かこさんは「子どもたちが僕の先生でした」とも記されています。子どもたち一人ひとりへの尊敬と深い愛情が込められたまなざしは、作品を通じて、これからも私たちに大切なことを伝え続けてくださるように思います。